

話題転換とポライトネス

—話題転換に用いる接続表現—

牧原 功（群馬大学）

要 旨

本稿は日本語において対話の話題転換に用いられる接続表現について検討したものである。対話における話題転換は相手の発話を遮り話者の話題を提示することから FTA を生じさせる可能性が高いが、話題転換の接続表現の「話題転換の権限の有無」、「先行話題との関連性の維持」「先行話題への回帰可能性」という因子が FTA に関与する可能性を示し、これらの点から接続表現を再考察した。また、日本語母語話者と日本語学習者の接続表現の使用状況を比較し日本語教育で望まれる対応に言及した。

キーワード：話題転換、接続表現、主題、ポライトネス、FTA

1. 問題の所在、本研究の目的

「話題転換」は会話において頻繁に行われるものである。そこでは何らかの談話標識が用いられることが多く、独話においては話者が自由に談話標識を用いて話題を切り替えることができるが、対話においては、先行話題への参加者に対して話題を変えることを示唆することになるため、話題転換の談話標識の提示は FTA となる可能性が高い。

筆者が大学で日本語のクラスを担当する中で、日本語学習者は「では」、「ところで」といった典型的な話題転換の接続詞を用いることが多いと感じていた。しかし、オンラインの講義が増え、学生同士のディスカッションを詳細に聞くことができるようになると、日本語母語話者がそれらの接続詞を用いる頻度はそれほど高くなく、「そういえば」、「で」、「～っていえば」のような表現がよく用いられているように感じられた。

また、話題転換の接続詞として一括りにされるものも、使用可能な文脈を想定すると機能の異なりもあるように感じられる。例えば、以下のような例では、「では」と「ところで」の使用に制約が見られる。

(1) A：この件についてはこれでよろしいでしょうか。

B：大丈夫です。

A：{では/*ところで} 新製品の件ですが・・・。

(2) A：久しぶりですね。お元気でしたか。

B：何とかやっています。{*では/ところで} 山田さんとは時々お会いになりますか？

このように、話題転換に用いるとされる接続詞にもいくつかのタイプがあり、それらを分析することが、日本語学習者が談話をスムーズに遂行することに役立ち、また、FTA の生じ方、ポライトネスストラテジーの用いられ方の考察にも役立つと考える。

以上のような問題意識から、本稿では、まず話題を変えることを示唆する談話標識を概観し、それらが FTA の大きさに影響を与える因子として「話題転換の権限の有無」「先行

話題との関連性の維持」「先行話題への回帰性の有無」を想定し、話題転換に関わる談話標識の性質を検討する。また、あわせて日本語母語話者と日本語学習者の話題転換に関わる接続表現の選択についての簡単な調査を行い、日本語教育上の課題を述べる。

これまで、談話標識、接続表現、接続詞といった用語を用いているが、談話標識は、以下に述べる村上・熊取谷（1995）で扱われた諸形式を指し、「ね」「あ」なども含む広範なものとする。接続表現は、接続詞及び話題転換の機能を表すために形式化された表現形式「～って（先行文脈に現れた事柄をトピックとして示しその話題に変換する）」「そういえば」等を指す用語として用いる。なお、例文のうち出典の明記されない例文は作例である。コーパスの用例は CSJ、NUCC、BCCWJ からのものであり、検索データは 2021 年 1 月時のものである。

2. 先行研究

話題転換についての主要な先行研究として、村上・熊取谷（1995）、West & Garcia（1988）、田中（2018）を取り上げ、それらの研究の主張を簡潔に示す。

2.1. 村上・熊取谷（1995）

村上・熊取谷は、話題導入までの参加者の相互行為の特徴から、前のトピックと後接するトピックの関係を「断絶型」「継続型」「割り込み型」の3つの「連結型」に分類した。「断絶型」「継続型」は、共に話題終了部が見られるものとし、両者の違いは長い沈黙の有無となっている。「割り込み型」は先行話題についての会話続行中に後続話題が導入されるもので話題終了部が見られないものとした。また、後接トピックの開始部に見られる結束性表示行動・言語表示を以下のように分類している。

- a 認識の変化を表すことば 「あ」「思い出した」「そういえば」「もしかして」
- b 相手に働きかけることば 「ねえ」「あの」「ちょっと」「しってる？」
- c 談話標識やメタ表現による談話展開の示唆 「で」「でも」「話は変わるけど」
- d 後続トピックのフレームの提示 「月曜日ね」「国際ホテルの」「Q さんて」
- e トピックそのものの提示 「教師って」

村上・熊取谷（1995）の述べる「話題終了部が見られるかどうか」は、話者聴者が先行する話題の終結について共通理解を示しているかどうかということでもあり、話題終了部があるタイプの方が話題終了部の見られない割り込み型より FTA は小さくなることが予測される。後接トピックの開始部の考察では談話標識以外にも様々な表現が用いられていることが示されており興味深い。

2.2. West & Garcia（1988）

West & Garcia は、話題転換の在り方について、以下の3つのタイプに分類した。

- 1) 協働的転換 複数の参加者が相互に境界づけ活動をした後に転換が行われるもの。
- 2) 断絶的転換 二つ以上の一秒以上の沈黙または二つ以上の最小限応答の後に転換が行われるもの。
- 3) 一方的転換 上記境界づけ活動や、沈黙や最小限応答などがなくまま転換が行われる

もの。

この考察は、話題転換において、話者聴者間で先行話題の終了をどの程度認識しているかを談話の流れから分類しようとしたものである。話者聴者が先行話題の終了を共通認識として持っていると考えられるものが協働的転換であり、共通認識として持っている可能性が高いものが断絶的転換、先行話題が終了したという共通理解の無いまま話題転換が強引に行われるものが一方的転換となっている。

2.3. 田中 (2018)

田中は話題開始時の談話標識についての先行研究を概観し、上述の村上・熊取谷 (1995) の分類を元にその後の研究が進めているが、村上・熊取谷の考察について「談話標識・接続詞を一つの分類にしており、個々の表現の機能による分析はされていない。(P. 131)」とし、個別の談話標識、接続詞の機能を検討する必要性を述べている。

また、田中は、話題開始のための談話標識を「①談話間の接続関係に対する話し手の認識」「②談話内容に対する話し手の態度」「③話し手の心的操作」の3タイプに分類している。

田中の研究は話題開始時の談話標識を考察の対象としたものであるが、形式ではなく機能から分類しようとした点でそれまでの研究とは異なる知見が見られる。

3. 話題転換に関わる接続表現

本稿では、話題転換に関わる日本語の談話標識の中から、接続詞及び一定程度に形式化した表現を取り上げて考察する。これらの表現形式を以下では接続表現と呼ぶ。接続表現にはいわゆる接続詞「では」「ところで」などの他、「話は変わりますが」「～といえば」のようなものが含まれる。

本稿では談話から話題転換時の言語標識を抽出するという形ではなく、日本語教育教材で取り上げられている接続表現を考察の対象とし、それらに筆者が母語話者の談話を観察し話題転換に頻繁に用いられていると感じた表現をいくつか加え、それらが談話においてどのように用いられるかを検討するという手法を用いる。これは、コーパスでは十分な用例が収集できないこと、収集できた用例も長大な文脈を提示する必要があり論文中の用例として示すことが現実的でないこと、そして、田中(2018)が述べるように、それぞれの形式の機能を考察することが重要であると考えられるためである。

3.1. 日本語教材で取り上げられている接続表現

日本語教材としては中上級の学習者を対象としたものとして『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』、『どんな時どう使う日本語表見文型 500』、『中級日本語文法要点整理ポイント 20』を参照した。『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』は厳密に言えば学習者用日本語教材ではないが、中上級学習者が習得する文法項目についての概説書であるとして対象に加えた。結果は、以下のようになった。

・『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』

「では」、「ところで」、「さて」、「ちなみに」、「それはそうと」、「それはさておき」

- ・『どんな時どう使う日本語表見文型 500』、『中級日本語文法要点整理ポイント 20』

該当する項目なし（「～といええば」のような表現形式が収録されている場合でも話題転換の機能として扱われていない）

学習者向けの文法項目の整理のための参考書に、話題転換の接続表現が取り上げられていないことは意外であった。教師向けのハンドブックにはいくつかの接続表現が取り上げられていたが、その説明は、機能を詳細に述べたものではなかった（具体的な記述は 4.3. 節で取り上げる）。

3.2. その他の表現

筆者が上記以外の表現としてよく耳にするものから、「話しは変わりますが」、「～といええば」、「～という」と、「そういええば」、「で」を日本語教材で取り上げられている表現に加えることとする。「～という」と、「～といええば」は接続詞ではないが、先行話題の中のトピックを新しい話題として取り上げ話題転換を行うタイプの表現であると考えられる。なお、「～という」と、「～といええば」には大きな差異は見られないため、本稿では「～という」とを取り上げるにとどめる。「で」は、「ところで」の縮約形とも取れるが「それで」の縮約形としても解釈は可能である。この曖昧性が FTA の緩和に有効に作用する可能性を考慮して「ところで」とは別の語として扱う。

4. 話題転換に関わる接続表現の機能の差異

話題転換に関わる接続表現にも、文脈による使用制約があるという点については既に 1 節で触れた。以下では、それらの使用制約に、「話題転換の権限の有無」「先行話題との関連性の維持」「先行話題への回帰性の有無」という性質が関与していると考え、それらの性質と使用制約との関連性を検討する。なお、「先行話題」とは、話題転換の接続表現を提示した後提示される話題から見た先行する話題を指す。

4.1. 話題転換の権限の有無

「では」「さて」は、話し言葉コーパスで調べてみると、独話の講演においてよく見られる。例えば以下のようなものである。

(3) ここまで指示代名詞との関係から指示副詞の史的変遷を考察してきました。では次に指示副詞の副詞的機能の変化について考察していきたいと思います。 (CSJ)
複数の会話参加者による談話において「では」「さて」が用いられる発話状況を想定すると、まず思いつくのは、(4)のような会議の司会者という立場での発話であろう。

(4) この議題についてはよろしいでしょうか？では、次の議題に移りたいと思います。また、「では」は、(5)のように相手の発話を受けて用いるタイプもあり、話題転換が本質的な機能ではない可能性も高い。

(5) A: 召し上がってください。

B: では、お言葉に甘えて・・・

上述の(3)から(5)の用例に共通するのは、発話者がある行為を行う権限を与えられた状況での発話という点であるように思われる。「では」が話題転換に使用されるのは話者が話題

を転換する権限を与えられていることの提示とも思われ、急に思いついた事柄を自由に新たなテーマとして提示して話題転換を行う際には使用できない。

「さて」もほぼ同様の性質を持っており、以下のように、話題や時間のコントロールを行おうとしていることを明示する場合に用いられている。(6)はとりとめのない雑談の中で、Bが話を切り上げようとして用いている「さて」である。

(6) A: かつこいいじゃん、すごい。

B: さて、そろそろ30分になりますが、33分とか書いてあるような気が。

(7) A: 映画か。

B: さて、映画の話も尽きないわけですが。

A: 尽きた。

B: まだまだしたりないとは思いますが、ここで時間も時間ですので、次の話題に。

(6)(7)とも NUCC)

なお、(7)の「さて」は「では」と言い換えることが可能のように思われるが、(6)は言い替えが難しい。本稿では話題転換の権限という点から類似性に言及するにとどめたが、詳細な用法の差異については改めて詳細に検討する必要があるように思う。

4.2. 先行話題との関連性の維持

先行話題との関連性を維持しつつ話題転換を行う際に用いられる形式としては、先行話題を引用してトピック化する「～なら」、「～といえば」が典型的なものと考えられる。

(8) A: そろそろNASを導入しようと思ってるんですよ。

B: NAS ならやっぱりQNAPですよ。最近Synologyも売れてますけど、安定性がちがいますからね。QNAPって台湾の会社なんですけどね・・・

(9) (ずっと田中さんの話題が続いている)

A: 今度、田中さん、大阪の方に転勤されるみたいですよ。

B: 大阪といえば、大阪都構想はどうなるんでしょうかね・・・

(8)(9)とも先行する文脈中に現れた事柄を新たな主題として取り上げるという形で話題転換を行っている。(8)はNASの話題からQNAPの話題に切り替えており、(9)では田中さんから大阪に話題を切り替えている。また、「そういえば」にも「～といえば」と同様の用法が見られる。

(10) A: ラストオーダーとかね。うんやっぱ、ここさ、もうちょっと長い間やってたらみんなね、ご飯のあとに来たいことない？

B: うんうん、ケーキ食べにね。うん。

A: そういえばこの前行ったあそこもおいしかったよね、ブンブカフェ。

B: うんああ、あそこおいしかったね。(NUCC)

この例では、現在食事をしている店の話題から、「ケーキといえば」のような意味合いで「そういえば」が用いられ、ブンブカフェに話題が転換されているように思われる。

これらの先行話題との関連性を示しつつ話題転換を行う表現形式は、日本語教材では、話題転換という機能から「ところで」「では」などと共に提示されておらず、学習者が話題転換の談話標識として使用できるという意識を持ちえない可能性があるが、先行話題との

関連性を残しつつ話題転換を行うという点で、聴者に生じさせる FTA は相対的に低くなる可能性が高く、汎用性が高く、母語話者が頻繁に使用しているストラテジーであると思われる。

4.3. 先行話題への回帰性の有無

以下の用例を見ると、「それはさておき」「それはそうと」には用法に違いがあるように感じられる。

(11) それはさておき、本題に戻りたいと思います。

?それはそうと、本題に戻りたいと思います。

(12) A：そろそろ出かけないと間に合わないよ。

B：わかったよ。{それはそうと、??それはさておき}猫に餌入れておいた？

A：入れておいたよ。

B：じゃあ、行こうか。

上記の例に見られる用法の差異が何に起因しているのかを考えてみると、(11)のように「本題に戻る」ということが影響している可能性が高い。「本題」でなくとも、先行する話題に戻る場合であれば「それはさておき」を用いることができるが、「それはそうと」は用いることが難しい。一方で、(12)のように先行話題と無関係の話題に移る際に「それはさておき」を使うことはなさそうである。用例を引用すると非常に長くなるためここでは避けるが、BCCWJ で検索した「それはそうと」の用例でも、「絵画の話→「それはそうと」→年寄りには気候がきつい→絵画の話」という流れでの使用や「文字起こしの話→「それはそうと」→出かける時間の話→文字起こしの話」という流れでの使用というように、先行する話題と関連性がなく、一時的にずれる話題を提示する際の使用例が多い。

なお、先行話題に戻るということは、戻った時点で現在の話題は打ち切られる可能性が高いということでもある。この点から見ると、「それはさておき」は先行話題への回帰可能性が低く、「それはそうと」は先行話題への回帰可能性が高い表現であると見ることができる。

これらの接続表現について、日本語教材や辞書でどのような説明がされているか見てみると以下のようになっている。『日本語文法ハンドブック』では「それはそうと・それはさておき」も「ところで」に近い意味の接続詞です。いずれも基本的に話しことばですが、「それはさておき」のほうが、やや改まった表現です。」とするのみで、用法の違いについては言及していない。『名鏡国語辞典』では「それはそうと」は「前の話を打ち切り、別の話題に移るときに使う語。「一、例の件ですが…」」「それはさておき」は「話題を（多く本題に）転じるときに使う語。ところで。閑話休題。「一、今日伺った用件は、…」」とされる。名鏡国語辞典のように文法的な性質を詳細に説明する辞書ではこのような記述がなされているが、『広辞苑』では「それはさておき」でも「話題を転ずる時に用いる。ところで。閑話休題。「一本題に入ろう）」のような簡素な記述にとどまる。一般的には日本語教材、国語辞典ともに、両者の違いを明確に示しているものは少ないと思われる。

「それはそうと」「それはさておき」の両者を比較した場合、「それはそうと」の方が FTA は小さいが、これは本来「それはそうと」を用いるべき文脈で、日本語教材に記述されて

いる、改まった表現であるという説明を鵜呑みにして「それはさておき」を用いてしまうと、大きな FTA を生じさせる可能性がある。日本語教材はこのような部分も考慮した記述を進める必要があるように思われる。

なお、話題転換について分析する際の因子として、「談話の中心軸となる（なっていた）話題への転換」であるのか「談話の中心軸からずれる話題への転換」であるのかという点も考慮する必要があるかもしれないが、誌面の都合上、今回は触れない。

4.4. 話題転換の接続表現の整理

3 節で取り上げた接続表現について、3 つの因子の観点から簡単に整理してみると以下のようになる。話題転換の権限は、「では」「さて」「こそれはさておき」では必要であるが、それ以外は無くとも使用可能と思われる。先行する話題との継続性は、「～という」とが明示するタイプであり、「ちなみに」が先行する話題を補填するために中心となる話題から一時的に逸れるという点で、「そういえば」「で」が「～といえ」「それで」のような解釈をし得るという点で、やや弱く提示するものと位置づけられそうである。話題の回帰性という点では、枝葉末節的な話題に移る「ちなみに」が強い回帰性を持ち、本題に移ることを示す「では」「さて」「それはさておき」は回帰性が無いか非常に小さく、それ以外は中立的と考えられる。

	権限の必要性	話題の継続性	話題の回帰性
では	○	×	×
さて	○	×	×
ところで	×	×	—
ちなみに	×	△（情報を補填する）	○
それはそうと	×	×	—
それはさておき	○	×	×
～という	×	○	—
そういえば	×	△（「といえ」的使用）	—
で	×	△（「それで」の解釈）	—

図 1 話題転換の接続表現の整理

5. 話題転換の接続表現と FTA

前節において、話題転換の接続表現を分類する際の因子として設定し得るものを取り上げ、実例を見つつ検討した。これらの因子が、話題転換により生じる FTA にどのように影響するのかについて考えてみたい。まず、「話者の話題転換の権限」であるが、権限がある場合の方が、権限が無い場合よりも FTA は小さくなる。これは以下のような例での FTA の大きさと同様のものである。

- (13) ここで写真を撮らないでください。（美術館で警備員が）
- (14) ここで写真を撮らないでください。（美術館で一般人が）

この二つの例では当然(13)の方が FTA は小さい。このことから、話題転換においても、発話者に話題転換の権限がある場合の方が FTA は小さくなると考えられる。しかしながら、話題転換の権限が無い者が、話題転換の権限がある際に用いる表現形式を選択した場合は、非常に大きな FTA が生じることが予測される。この点で、日本語学習者に対しては、「話者の話題転換の権限」の有無によって使用できる接続表現が異なるということは提示すべき情報と考えられる。

次に、「先行話題との関連性」であるが、これは B&L のポジティブポライトネスストラテジー「一致を求める」の影響を受けると考えられる。また、「先行話題への回帰可能性」も、やはり「一致を求める」というポライトネスストラテジーと関連する。聴者が話題をどのように扱うかについては様々な選択があり得るが、それらを一致の大きさから整理すると以下のようになるだろう。

話題をそのまま維持する > 先行発話から新たな話題を取り立てて提示する >

先行話題への回帰を示唆する > 先行話題への回帰可能性が低い状態で話題を転換する

これらの点から、「先行話題との関連性」を示しつつ話題転換を行う、「先行話題への回帰可能性」を示しつつ話題転換を行うという場合、FTA は軽減されることが推察される。また、ポライトネスストラテジーとして、本来は先行話題と関連しない場合も関連があるかのような表現形式を用いたり、先行話題に回帰しない場合であっても、回帰可能性があるかのように述べたりすることもできるだろう。これは、母語話者がなぜ話題転換で「で」を頻繁に使用するのかについての説明原理ともなる。話題転換で用いられる「で」は「ところで」の縮約形であると考えられるが、「で」自体は順接の接続詞「それで」の縮約形としても用いられる。実際に「それで」も、一貫して続く話題から逸れた内容を本題に戻す場合に用いられることもある。

(15) A: 今年度の決算なんですが、新型コロナウイルスの影響が大きく・・・

B: 新型コロナ、なかなか収まりませんね。

C: 今度はオミクロンですからね。どうなるんでしょうかね・・・

D: それで、決算はどうなったんですか？

「で」が「ところで」なのか「それで」なのか判然としないということから、この曖昧な形式をあえて用いることで、先行話題とあたかも関係があるかのように述べるということを行っている可能性もある。また、このような現象は West&Garcia の言う、協働的転換に近付けるための方略であるとも言えそうである。

以上のように、話題転換の接続表現を「話題転換の権限の有無」、「先行話題との関連性の維持」「先行話題への回帰可能性」という点から分析することで、話題転換に伴う FTA の大きさを予測でき、日本語学習者が FTA を避けるための有益な指標を示し得る可能性を示せたように思う。また、これまで、それぞれの接続表現の使用される発話状況を詳細に検討する先行研究がほとんど見られないという現状の問題点も示し得たと考える。

6. 日本語学習者の話題転換に関わる接続表現の選択状況

本節では、ここまで観察した接続表現を母語話者と日本語学習者がどのように使用しているかについての、簡単な調査結果を示す。対象者は、日本語母語話者は群馬県立女子大

学国文学科の1年生から4年46名、日本語学習者は、群馬大学が実施した日本語クラスに参加した留学生25名である。留学生はすべて大学院生である。また、留学生は全員JLPTN1に合格しており、国籍は中国15、ベトナム6、モンゴル3、アゼルバイジャン1であった。質問形式は空欄補充の自由記述とした。日本語学習者の回答総数が25に満たない場合は、未回答（空欄）があったことによる。調査の実施時期は2021年6月である。

6.1. 話者に話題転換の権限がある場合の接続表現の使用

(17)の内容で、以下の文章の（ ）に最も適切と思う表現を入れるように指示したところ、図2のような結果となった。

- (17) A：こちらの議題については承認ということによろしいでしょうか？
 （ ）、次の議題に移りたいと思います

	では	それでは	じゃあ	それなら	さて
日本語母語話者	26	18	2	0	0
日本語学習者	14	6	0	3	2

図2 回答結果1

6.2. 先行文脈中の要素を新たな話題とする場合の接続表現の使用

以下の文章は、新型コロナウイルスの話題から、ワクチン接種の話題に切り替えるものである。話題転換のやり方は通常の話題転換の接続詞を用いる、先行文脈の要素をトピック化する等、いくつかの選択肢がある。結果は図3のようになった。

- (18) A：またコロナの感染が広がってるみたいでちょっと心配ですね。大学も入構規制をするみたいだし……。東京は8月末には1万人の新規感染者が出るっている予想もありますよね……。

- B：（ ）、先週ワクチン接種券が届いたんで、予約しようと思ったんですけど、一杯で予約できないんですよね。予約しました？

- A：夜中の12時を過ぎると1週間後の接種予約が可能になるんで、12時過ぎにラインでアクセスすれば簡単に予約できますよ。つながりにくくなってますけど。

	ところで	それはそうと	さて	ちなみに	さて
日本語母語話者	40	6	0	0	0
日本語学習者	14	6	0	3	2

図3 回答結果2

6.3. 先行話題に回帰する場合の一時的な話題転換における接続表現の使用

以下の設問は、先行話題に回帰することを前提として一時的に話題転換を行う際の表現を問うたものである。結果を図4に示す。

- (19) A：この前雷でエアコン壊れたでしょ？あれ火災保険使えるって。

- B：そうなの？
- A：エアコンは移動できないから家財じゃなくて家屋なんだって。だから家財の保険に入ってなくてもOKだって。
- B：（ ）、これ食べていいの？
- A：あ、食べていいよ。
- B：エアコン保険で買い替えられて助かったね。

	ところで	それはそうと	で	さて	ちなみに
日本語母語話者	34	6	6	0	0
日本語学習者	16	0	0	4	2

図 4 回答結果 3

6. 4. 日本語母語話者と比較した場合に日本語学習者に見られる傾向と問題点

日本語学習者の回答結果を見てみると、話者の権限で話題転換ができる場合に用いる「では」、「それでは」の運用は良好である。回答者に個別に回答の選択理由を質問した際には、大学の演習等で、「では、次に〇〇さん」、「では、始めさせていただきます」のように用いるので、それを入れた、という答えが多かった。

一方、話題転換に際して権限の無い場合に、接続表現の適切な運用が難しいことが推察された。「それはさておき」のような、高い語彙レベル、文法レベルの表現を不用意に使うなどの事例はあまり想定する必要はないが、既習事項である「～といえば」のような表現を適切に用いることが難しいことがわかる。

先行話題に回帰する場合での一時的な話題転換では、日本語母語話者の一定数が「で」を使っているのに対し、「で」を選択した日本語学習者がいなかった点が注目される。このような「で」の使い方を教科書等で目にするのがないためであると考えられるが、日本に長く生活する学習者であれば、自然習得で使用している可能性もある。今回の調査対象は JLPT の N1 は取得しているものの、大学院生中心であったことが影響しているのかもしれない。また、日本語学習者では「ちなみに」を用いる例が比較的多く見られた。「ちなみに」の持つ、先行話題についてやや脱線しつつ補足するという機能が十分理解できてない可能性がある。

上記から、話題転換の接続表現の使用は、日本語学習者にとって習得上困難な点があることが予想され、このような運用の困難さに対応した日本語教材等の作成が必要であろう。

7. 今後の課題

以上、話題転換に際して母語話者と日本語学習者とで使用する談話標識が異なるのではという疑問から、話題転換の接続表現を分析する際の視点となり得る因子を提案し、それに従って話題転換に伴う FTA の大きさ等について検討した。研究ノートの内容になったように思うが、「さて」と「では」の違い、「それはそうと」と「それはさておき」の違いなど、詳細な用法の差異を記述する研究は今後行うべき大きな課題の一つと考える。

また、コーパスを用いて検索しても数多くの用例が見つけれられるわけでもなく、作例に

頼りつつ論を進めなければならなかった点については、本研究を更に進める際には検討すべき事項と思う。また、限られた被験者を使って大まかに母語話者と日本語学習者との接続表現の選択状況を比較したが、興味深い結果も出ており、さらに規模を拡大して信頼性の高いデータを元に再度検証を行うことも重要であろう。

今回は形式に注目して分析を行ったが、談話の進行状況を加味しながら、どのような表現形式が用いられるかを検討する必要性も感じている。特に話者聴者間で先行話題が終了したという認識がなされているかどうかによって使用される表現形式も異なってくるはずで、会話分析的な考察も取り入れる必要がある。

以上の諸点については今後の課題としたい。

参考文献

- 川越菜穂子(1995)「ところで、話は変わるけどーTopic shift marker についてー」
『複文の研究』くろしお出版、463-479
- 木暮律子(2002)「日本語母語話者と日本語学習者の話題転換表現の使用について」
『第二言語としての日本語の習得研究』5、5-23
- 田中奈緒美(2018)「談話理解の始点から見た話題開始のための談話標識の分類」
『日本語教育』170 130-137
- 楊虹(2007)「中日母語場面の話題転換の比較—話題終了のプロセスに着目して—」
『世界の日本語教育』17、37-52
- 村上恵・熊取谷哲夫(1995)「談話トピックの結束性と展開構造」『表現研究』62、101-111
- Brown, P. & S. C. Levinson (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*.
Cambridge: Cambridge University Press. 田中典子監訳(2011)『ポライトネス 言語使用における、ある普遍現象』東京：研究社
- West Candace and Garcia Angela (1988) 'Conversational shift work: A study of topical transitions between women and men' *Social Problems*, 35, 551-573

参考資料

- 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』(2001) スリーエーネットワーク
- 『どんなときどう使う日本語表現文型 500』(2010) アルク
- 『中級日本語文法要点整理ポイント 20』(2007) スリーエーネットワーク
- 『広辞苑 (第七版)』(2018) 岩波書店
- 『名鏡国語辞典 (第三版)』(2020) 大修館書店

(牧原功、群馬大学学術研究院准教授、makihara@gunma-u.ac.jp)